「国語の力」（垣内松三著）について

―国語教育学説史研究―

野地潤家

一　「国語の力」研究の課題
二　「国語の力」享受の一面
三　「国語の力」考察上の問題
四　「国語の力」研究文献目録

一

「国語の力」研究に関して、西尾実先生は、「われわれは、もう一度、『国語の力』を読みかえして、いまの国語教育のありかたを、その原頭に立って省察することが、これからの進展に欠くことのできない用意のひとつではないかと思う。」（「『国語の力』の現代的意義」、有朋堂版「国語の力」所収、ｘｖ）と述べられ、また、時枝誠記博士は、「私が、いつも勧める言葉は、もう一度『国語の力』に立戻って、そこに示された国語教育論や方法を再吟味し、それを乗越えて行く冷静さとねばり強さがほしいものだという

ことである。そこには、我々の先輩の築いた一つの確かな道がある。それを再検討し、乗越えて行くところに本当に自主性のある国語教育の道が開かれるのである。」（「国語学研究者のために」、同上書、18ページ）と述べられて、いずれも、「国語の力」を基盤にして、国語教育研究を進展させていくようにすすめられている。

また、興水実氏は、「国語教育の学問的研究を心がける者は、アメリカの研究成果の断片的紹介よりも、まず垣内学説、その中でも『国語の力』を読んでこれを基盤として、ここから出発すべきである。」（「国語教育の学的研究のために」、同上書、27ページ）と述べ、西原慶一氏も、「垣内文献は先生の死によって、その溢れる情熱の余韻をおさめたのであるから、冷静に、客観的に、学問的対象として誠実にとりあつかわれねばならない。」（「実践者のために――垣内的秘典――」同上書、39ページ）と述べている。

なお、「国語の力」についてのみ言われたものではないが、倉沢栄吉氏は、「今後の国語教育は正しく、実践的思考の学として樹立されなければならないが、そのためには、垣内先生の残された学風に立ちながら、その体系の肉付けをしていくべきであって、それができあがるまでは垣内先生は、地下で、眼を光らせておられるはずである。」（「垣内先生と今後の国語教育」、「実践国語」昭和27年11月1日刊、120ページ）と述べ、また波多野完治氏は、「あらわれたものとしての、垣内学説をではなくて、あらわれたものの背後にあるものとしての垣内学説の真髄をとらえ、それを発展させてこれを体系にまでもち来すことこそ、垣内学説の信奉者、そのあらゆる関係者の、今後努力すべき点ではあるまいか。」（「あらわれたものの背後にあるもの」、「コトバ」昭和14年11月1月刊、82ページ）と述べている。垣内学説の継承発展について、それぞれ述べられているのである。

しかし、ここに要望されているような「国語の力」の研究、「垣内学説」の研究、国語教育研究は、やさしい仕事ではない。それだけ慎重に、国語教育学説史研究の立場からも、国語教育実践の立場からも、この課題がとりあげられなくてはならない。

二

「国語の力」は、大正11年5月8日に、不老閣書房から刊行され、昭和17年に絶版になるまで、数多くの版を重ねていった。その重版過程は、つぎのようである。（×印、未見）

初版	大正11年5月8日	不老閣書房
再版	大正11年5月26日	
三版	大正11年5月30日	
四版（訂正）	大正11年7月20日	
五版	大正11年8月20日	（7月10日となっているものもある。）
六版	大正12年2月10日	
七版	大正12年7月5日	
八版	大正12年11月15日	
九版	大正13年5月5日	
一〇版	大正13年5月15日	
一一版	大正13年6月10日	
一二版	大正13年10月10日	
一三版	大正13年10月20日	

一四版	大正14年1月20日	
一五版	大正14年3月20日	
一六版	大正14年5月10日	（3月15日となっているのもある。）
一七版	大正15年2月5日	
一八版	大正15年2月10日	
一九版	大正15年2月20日	
二〇版	大正15年3月5日	
二一版	大正15年4月5日	
二二版	大正15年7月10日	
二三版	大正15年10月10日	
二四版	昭和2年7月1日	（昭和3年6月8日となっているのもある。）
二五版	昭和2年12月1日	
二六版（改版）	昭和3年6月25日	
二七版	昭和3年7月17日	（昭和4年2月5日となっているのもある。）
二八版	昭和4年2月1日	
二九版	昭和5年5月5日	
三〇版	昭和6年12月25日	
三一版	×	
三二版	×	
三三版	×	
三四版	昭和7年10月2日	
三五版	×	
三六版	昭和8年8月10日	
三七版	×	
三八版	×	
三九版	×	
四〇版（記念改版）	昭和11年5月27日	
（絶版）	昭和17年	
復刊	昭和28年8月20日	有朋堂

右によってみれば、大正末期から昭和初期にかけて、とくにひろく読まれたことがうかがわれる。

「国語の力」が読者に与えた感銘はどのようなものであったか。それは、つぎに掲げる諸氏の回想・記述によって、その一面を察することができる。

1　「朝鮮にいました大正十一年五月のある日、垣内先生から御高著『国語の力』をいただきました。通読していくうちに、解釈の力の条下、六『センテンスメソッド』から見た読方の現状という所に、私が取扱った『冬景色』が、実例として引用されていました。私が漢文教授の方法を継承した我が国語教授にあきたらないで、壇上で悶えたり、考えたりして到達した『冬景色』の教授が、垣内先生のお見出しにあずかって、お役に立ったことは、ただもうありがたいという外に言葉はありません。私も二度目に東京高師付属小学校にはいってから、足かけ十八年、こつこつ壇上に働いた足形が、これによって酬いられた訳です。」（芦田恵之助著「第二読み方教授」411～412ページ、大正14年9月15日刊）

2　「思えば自分は、大正十年の春の学期にはじめて先生から『文学史』と『文学概論』の講義を聴き、大正十一年の初夏に『国語の

力』の新著を得て更に叙上二種の講義を続け聴き、大正十二年春から特に頼んで有志の者だけでモウルトンの原著の講読をお願いしたのであった。モウルトンに明けてモウルトンに暮れたのであった。その後久しく先生の許を離れていたが、先生から『国文学と国語教育』の題を与えられて一書を纒めてみたが、結局自分は先生の『国語の力』時代の下にあって、その後の発展の迹を追って行くことが出来ないような気がした。その代り『国語の力』の勢力は殆ど絶対的で到るところに浸透している。之を改めて説こうとすると、いつも直接先生の言葉か他人の言葉を採用して説くより外ない。」（石井庄司著「読方教育思潮論」155～156ページ、昭和14年2月5日刊）

3　「（前略）しかし強いて過去の思出を語るなら、あの『国語の力』の出た時の感激である。当時（大正十一年）東京高師に入学したばかりで国文学の研究法に疑問を抱いていた私は、此の書に依ってどれほど国文学に対する研究情熱を鼓吹されたかわからない。それから特に御指導を仰ぐようになり、外国の文学研究法に関心を持ちつつ国文学の研究法を考察して今日に及んだ。」（渡辺茂稿「垣内先生と私」、雑誌「国語教室」昭和13年1月1日所載）

4　「今日までの永い研究生活を振返って見て、得難い経験と考えられることは、大学卒業と同時に、中等学校の国語教師として教壇に立ったことである。」「（前略）私は絶えず生徒と共に行動し、彼等を知ることに興味が集注されたが、国語教授ということが、全く未知な世界であったことには私は非常な不安を感じた。その頃垣内松三氏の『国語の力』に接したことは、全く暗夜に燈を得たような思いであった。私は感激を以て熟読し、その難解な叙述の中にも、何か清新な光が漂っているのを感じたのである。これを国語教師の無二の指針として、読み且つこれを実践することに努めた。西尾実氏が同僚の先輩であったことも、後年同氏の著書に親む機縁となった。」（時枝誠記著「国語研究法」42～43、昭和22年9月30日刊）

5　○「私が垣内先生を間接に識ったのは『国語の力』が初めて世に出た時で、光を投げかけられ奮い起つ力を付与されたようなあの読後の感激は、今もまざ〳〵と想い出すことが出来る。」（滑川道夫稿「国語教育と垣内先生」、雑誌「コトバ」昭和13年2月1日刊所載）

○「わたしの熟読した『国語の力』（初版大正十一年五月）は、昭和三年六月第二十六版改版発行のものであるから、すでに国語教育の名著として先進の国語人にもてはやされ、国語教育に心を寄せるものの必読書として認められていたころである。」（滑川道夫稿「『国語の力』の位置」、雑誌「実践国語」昭和27年11月1日所載）

6　「（前略）先生のおすがたとともに思い出すのは先生の名著『国語の力』である。わたしは、あの書を読んで、この書によって、そのころのわたしの国語教育の情熱が、しんから定着したような気がした。」「わたしが教壇に立った大正四・五年ごろには、まだ、国語教授は形式即ち文字、語句、文章の構造、文法などを教えるのが主か、内容即ち、文の中に書いてあることがらを教えるのが主かという論が盛んにおこなわれていた。」（田中豊太郎稿「垣内先生と国語教育」、雑誌「実践国語」昭和27年11月1日刊所載）

7　「先生の名著『国語の力』に接したのは、もう三十年も昔のことである。その当時、語句中心の講解指導に終始していた私には、大きな啓発であった。それが少しのみこめたのは、青田恵之助先生

の『冬景色』の指導の実例によるところが大きかった。垣内先生の文章は難解であるというのが、一般の人々の批評である。ところが、この『国語の力』は、そうでもないように思える。で、私は『冬景色』の指導例と深い理論的説明とによって、新しい国語教育の行き方がわかったような気がした。」（志波末吉稿「垣内先生と国語教育」、雑誌「実践国語」昭和27年11月1日刊所載）

8　「昭和三年に学徳を出た私は、自分が経験して来たと同じ方法で、児童たちに、読んで、語釈をして、書取練習をするという読方と、前期的な実用性と形式に重点を置いた綴方教育を唯一の国語教育方法と考えて熟心に指導した。」「（前略）これではいけない。教室にも自然な和やかさを、国語にはもっと生き生きした魂力を、ことばの教育は日常生活に直結しなければならない。そんな考えを素朴ながら持ち、周囲の友人にも話し、しかもその道が開けずなやんでいた時、手にしたのが垣内先生の『国語の力』である。むさぼるように読んだということば、今日までそう数多く経験しないが、『国語の力』は、まさしく私にとって、むさぼるように読んだ第一の書物であった。朱線を引きながら何べん読んだかわからない。」（飛田多喜雄稿「垣内先生と国語の力」、雑誌「実践国語」昭和27年11月1日刊所載）

9　「先生の著にはじめて接したのは、大正十二年十一月『国語の力』を購読した、師範学校三年生の秋であった。それ以来この書は、わたしの座右の書となっている。」（沖山光稿「追憶」、雑誌「実践国語」昭和27年11月1日刊所載）

10　「垣内先生に、私の教壇を見ていただいて御指導を受けたのはもう二十年あまりも前のことであるが、今もなおその時の先生のお姿と、一言一句が強く思い出される。名著『国語の力』を読んだ感銘――国語教育の奥深い道に、いつの間にかふみこんだのも、先生の感化があずかって力となっている。」（泉節二稿「故垣内先生をしのんで」、雑誌「実践国語」昭和27年11月1日刊所載）

11　「不朽の名著『国語の力』を、吸いつくように手にしたのは、多分大正十一、二年頃だったと思う。それ以来国語の力という眉眼が、私の拙い研究の方途を明示して下さったのである。お書き下さった『雪片を手にして、その微妙なる結晶を見んとする時、掌上に在るものは、一滴の水なり。』の御立言が私の心臭に喰入って、それ以来私は国語教育の深遠な境地を求めて、ひたむきに進むようになった。しかし『国語の力』は一二回の読破では、凡骨の容易にその真髄をかみしめることはむずかしかった。私は先生の御著書全部を読もうと図った。」（加茂学而稿「愛国の情熱」、雑誌「同志同行」昭和13年2月1日刊所載）

12　「深い感銘を以て二年前に熟読してから絶えず脳裏を去らない『国語の力』の学説が、先生にお目にかゝることに依て全く、新鮮な魂力を以て、脳裏に蘇って来るのを感じた。」（真田勝利稿「垣内先生と私」、雑誌「国語教室」昭和13年1月1日刊所載）

13　「私如きも此の書に依って始めて国文学研究及国語教育の真髄を明示された事を有難く嬉しく拝誦したものである。実に私が先生を敬慕するに至った最大の要因も此の一書にあるのである。その後屢大なる著述が次々に刊行されたけれども遂に此著を源泉としその拡充発展の姿を示している様に思う。」（大野静稿「垣内学説の学的実践的優位」、雑誌「同志同行」昭和13年2月1日刊所載）

14　「大先生の御研究に接することが出来たのは、師範卒業当時、

大正十一年頃であった。その不朽の名著『国語の力』を求めた時である。此の名著を買い求める心になったのは、当時老師の高弟であった、宮城師範付属の訓導である山木清吉先生に勧められたからである。山本先生は、私の小学校の恩師である。当時の私は、垣内松三教授の御名をも知らぬ青二才であった。読み浸ったものの、理解出来よう筈もない。唯記憶力に訴えて、『国語の力』には、などと口にして、沐猴然として、得意がったものであった。思えば流汗三斗である」（安田孝平稿「孫弟子」、雑誌「同志同行」昭和13年2月1日刊所載）

右の諸例によって、「国語の力」がその刊行当初、またそれにつづく昭和初期に、どのように受けとられ、読まれたのか、その一面をうかがうことができる。どの例も記述が簡単であって、これらをもって「国語の力」の受けとりかたの全貌を示すものとみてはならない。しかし、共通に見いだせることは、「国語の力」を感銘深く受けとり、そこから多くのものを吸収し、あるいは吸収しようと努め、それぞれの国語教育研究や実践の上に、大きい影響を受けているという点である。そこには、国語教育実践者、もしくはそれに準ずる立場で、「国語の力」を読み、各自の実践の上に生かそうとする態度がみられる。

さらに、戦後の教育学部学生が「国語の力」を読んでの感想は、つぎのようである。

15 K・K（満22歳）のばあい

①通読所要時間（11時間25分）（6日間）

②読後感

(1)〝国語の力〟についてかたむけられた情熱と、広く深い考察とは、読むものに新しい力を与えてくれる。批判と把握と追求の強さがわたくしに迫ってくるようだった。

(2)全体の構成は、自由にはばたく論の翼を思わせ、ひきつけられていった。自己の立場さえきまっていれば、どこからでも教えられ、目覚めさせられる。文法教育・言語教育についてもそうであった。

(3)「解釈の力」を読んだあとは、わたくしの内部にある解釈の心が、この文章によって、形としてひき出されたように思われた。そしてなんだか国語教育論の歴史的生命といったものを感じた。

(4)「国文学の体系」は、いかなる文学概論よりも身につくものがあり、いかなる文学教育論よりも豊かな深い示唆を得たとさえ思うほどである。そして自分なりに一つの文学における焦点をきめて、その持続的展開を研究してみたいという気持にかられた。抒情文学などについての論はとくに心に残った。

(5)文章は流れるように読める場合と、長く時間がかかるところとある。これも独自性のもたらすところであろう。全体的に割合にセンテンスが長いように思う。「引用」は卓抜なものであるが、時には悩まされることもある。そらされる感じを抱くこともある。

(6)文学史の目的についての叙述はすばらしいと思った。

(7)「文の形」は中心をなすものであろうと思うのであるが、残念ながらもっとも受けとりにくかった。ゆっくりと考えながら、読まなければならないところであろう。まだわたくしの

力がおよばないのか。

③現代的意義　現代的意義は大いにあると思う。国語、国文学、国語教育に関心があるものなら、幾度、だれが、いつ、読み返してもよいと思う。その時、必ずなにか新しいものをうるだけの力が、この書にはある。現状の一般的国語科観を考える時、いくらも推進されていない感をいだき、いつも新たに考えなければならぬことと思った。もっともっとわたくしたちには受けつぐべきこと、考えつつ行わなければならぬことがあることを知らされた。（昭和29年4月10日記述）

16 M・Y（満22歳）のばあい

①通読所要時間（25時間）（7日間）

②読後感

非常にむずかしいものと思い、緊張した気持で「国語の力」に向かったが、思いもよらぬ興味にひかれて、垣内先生のことばが全身に伝わるようであった。わずかな箇所をのぞいては容易に理解し得て、読後かくも明日への力を得たものは数少ないように思う。しかし、これもまだ「読み」が浅いのではないかという反省をうながされる。

(1)学問に対するきびしい心の据え方を感じる。――洗練された直感の重要性。

(2)それに関連して、自由な考察を試みたあとがうかがわれる。

(3)内面的な関連が明瞭でまとめがしっかり把握できる。

(4)研究の力の向け方を考えさせられる。

(5)一道かはっきりきわめられて書きとどめられ、自信あるものが伝わってくるようである。

(6)「環月」が理解をはばむ面があったようである。

(7)部分的にはかなり難解な箇所があった感いがあるが、大きなものの把握によりおのずから快く理解されたようである。

(8)自分の心の中にうやむやとしていたものが、はっきり掘りおこされたような気持がしきりである。

(9)もっと早く熟読すればよかったという気持もするが、今読んだ教により効果的であったという気持が起こってくる。これまで「私のもの」となったものが体系づけられたということに基づく。

③何を考えさせられたか

(1)実践に即した方法の考察――国語教育において、根本的にはこれ以上のものはないという思いでいっぱいである。かかる心強いものの上にしっかりと足を踏みしめて、われわれのなすべきことは、実践に即して限りなき展開の方向を確実に把握することであると考える。国語教育は人間に関することであるから、実践ととりくみ、普遍的なものにしていきたいと思う。

(2)研究態度について――垣内先生の言われる「持続的な本質の把握」は、われわれが常に心深く考えなければならぬ点であると思う。しかし、教師の性格・環境により、研究すべき一対象に集中することも忘れてはならないと思う。研究の対象と対象との関連――「持続的な本質」――については、垣内先生のご意見により明白に理解されるが、この関連の全体（あらゆる面で）を展望する面と、研究の一対象を凝視する面とは、意のままに連続しないものと考える。研究の出発点

において、またその途上において、研究者の性格、環境、その他条件に挙げられることを十分に考察して、全体につながる確とした研究の目標を、心ゆくまで展開せしめることが大切である。今後、多くの努力と工夫に待たなければならないことを痛感する。

(3)自己の研究態度の反省――卒業論文を書いた直後、心の内の自信ある面と自信なき面が明白に形作られる。研究の一対象の大きな把握もさることながら、根拠を細かくえぐりとらなければならぬことを考えさせられる。「一語」なりともおろそかにし得ぬことばに対するつつましい心の態度が、この根底になるべきであると思う。読みつつ私の態度を反省する時、「国語の力」をもっともっと熟読したいという気持にかりたてられる。

(4)わが国の国語の向上の希求――常に考えていることではあるが、今さらのように新しいものとして、心にきざまれる。大きな視野の下にゆうゆうとして求めていきたい。

(5)韻律的考察の重要性と困難さの自覚。

(昭和29年3月23日記述)

右の二例もまた、「国語の力」から多くのものを吸収し、感銘をきざまれたことを示している。

三

つぎに、「国語の力」考察の基本問題として、

1「国語の力」をささえる「実践」の問題

2「国語の力」付録、「国語教授と国語教育」の「立場」の問題

3「国語の力」にみえる「心の面前」の問題

の三つの問題をとりあげたい。

1「国語の力」をささえる「実践」の問題

垣内松三先生は、「国語の力」序において、「この叢書に述べたことは、既に二十余年の間唯一人で考えもし行っても来たことであるが、それを話して見たのは附録講演が始めてである。」(有朋堂版「国語の力」4ページ)と述べていられる。このうち、「既に二十余年の間唯一人で考えもし行っても来たこと」の「行っても来たこと」とあるのは、狭い意味では、国語教育の実践体験そのものを指しているかとおもう。

垣内松三先生は、明治四十五年から大正七年まで、東京女高師に奉職され、そこで、「徒然草」、現代文などの講説、修辞学の講義、それに含めての作文の指導などを担当された。そのころの講義ぶりについては、当時の聴講者であった三浦ひろさん・稲村テイさんが、回想して具体的に述べていられる。

たとえば、三浦ひろさんは、「有難い先生」(「同志同行」昭和13年2月号)において、「この大正五年、即ち私の文科一年の頃垣内先生は私達をお教え下さったのですが、直接私が先生に御指導いただいたのは、後にも前にもこの大正五年という年たった一年だけでした。しかし在学四年間の中一番感銘の深い御指導で先生の時間といえば、いつも心の躍るようなよろこびを与えられたものでした。」106ページ)と述べ、垣内先生の講義のことが回想されている。

また、稲村テイ氏も、「その頃の先生」(「コトバ」昭和13年1.2

月合併号）において、「垣内先生の時間――修辞学、現代文鈔、徒然草――どの時間を思い出しても先生の御態度やら御言葉やらがはっきりと浮かびます。『特別にいい頭の時でないと垣内先生の御授業はわからない。』いつとはなしにこうした心がまえが生徒の中に出来て、誰も彼もが潑剌とした気持で輝やかしい眼ざしで先生をお教室にお迎え致しました。然し一時間中殆んど何も解らずに過したことも一度や二度ではございませんでした。徒然草は女学校時代から受験準備にかけて幾度となく繰返し読みましたので、かなり親しい本ではございましたけれども垣内先生にお習い致しました時、本の読み方にはこうした世界もある物かと不思議な感が致しました。（中略）垣内先生にお習い致して居ります中に私共は新しい世界に国語を勉強することの喜をだん〳〵強く感ずるようになりました。その頃私の得られましたものは、ほのかなものでございましたでしょうが、其の後今日まで国語の勉強への大きな力になって居ります。私の女高師の勉強時代に先生のいらっしゃいましたことは大きな誇でございます。」（134～135ページ）と述べて、女高師時代の垣内先生の授業のことを回想している。

これらによってみても、垣内松三先生がまじめに熱意をもって、実践にあたられたことがわかる。「国語の力」は、単なる思弁の産物ではなくして、すでに垣内松三先生が実地に試みられ、実践を通してえられたものがその裏づけになり、足場になっているとおもわれる。

たとえば、「国語の力」の中に引用され、説明されている「徒然草」92段の「ある人弓射ることを習ふに……」の解釈も、女高師での「徒然草」講説で扱っていられるものがもとになっているし、「国語の力」に引用されている夏目漱石のことも、女高師での先生の時間に、よく話されたということである。また、「国語の力」の本文の中にも、センテンス・メソッドを論じられた一節に、「かようにいうのは学説の上から考えた思いつきでない。長い教授の経験の上から明言することもできる。」（有朋堂版「国語の力」11ページ）と述べていられる。

「国語の力」においては、実践をぬきにした単なる方法論が、本文の随処にさしはさまれた具体例によって説明されているというのではない。「国語の力」序に、「これまで『国語』を学ぶ人教える人から『国語』の学習に就いて、いつまでもこんなことをして居てもよいのかと尋ねられたことが、いく度あったか知れない。併しながら同じ不安をいだいて、その答を求めて居たわたくしには、その疑いを尊重するほど、それに就いてありあわせの答をすることは慎まねばならなかった。」（有朋堂版「国語の力」1ページ）と述べてあるのを見ても、垣内先生自身の「国語教育実践」の体験とその反省と、それにもとづく思索が根底にあることを忘れてはならない。

「国語の力」の成立過程を考え、その内容分析をしていくばあい、それをささえている垣内先生のこのような「実践」の側面をみのがさないようにしたい。

2 「国語の力」付録、「国語教授と国語教育」の「立場」の問題

「国語の力」の付録の長野講演の筆録「国語教授と国語教育」は、「国語の力」成立のきっかけになったものであり、また垣内先生の考えかたが集約されている点で、今までも重くみられてきた。たとえば、興水実氏は、「『国語の力』の中で特に国語教育研究の

問題を取りあげているのは附録の『国語教授と国語教育』のところである。これは附録といっても実際は『国語の力』全体の原形であり集約であることは、序文に見えている。この中で研究上特に重要なのは、講読・作文・文法は単に『系素』であって、その『合体した体系がはじめて学的思惟の対象になる』として、全体から出発しておられる点である。もうひとつ、人々はすぐに教授法を問題にするがそれについて今何か思いつきを述べたのでは『屋上屋を架する』だけで、『一歩深くその内面的考察から出発することが落ちつきを得られる』といっていられる点である。」（「国語教育の学的研究のために」、有朋堂版「国語の力」補説、22ページ）と述べていられる。この講演は、長野師範において、長野県下の中等学校の先生がたを対象にしてなされたもので、中等学校の国語科の問題が正面からとりあげてある。講演のはじめに、「本日、この会に於て更に所見を申上ぐる機会を与えらるゝに当りまして、各学校に就いて申述べました実際問題とは別に純学問的立場から、国語教授と国語教育に関する私見を申上げたいと存じます。」（有朋堂版「国語の力」293～294ページ）と述べてあるように、旧制中等学校の国語教育の根本問題が「純学問的立場」から扱ってある点を重視したいとおもう。

この講演が「国語の力」成立のきっかけの一つになったことは、もとより大きい意義をもつ。しかし、この講演は「国語の力」そのものから切りはなして考えても、旧制中等学校における国語科教育論史の上で、独自の意義をもっている。この講演は国語教育学の源流の一つとして、とくにその「立場」に注目すべきものをもっている。

3「国語の力」にみえる「心の面前」の問題

「国語の力」の叙述面の問題の一つとして、「心の面前」という、いいかたをとりあげたい。

「国語の力」には、「心の面前」「自己の面前」の用例として、つぎのようなものがみられる。

(1)「第二に希求する点はかくの如くにして得たところを自己の面前にひしと捉えてもっと高次的な立場からの解釈を求むることである。」（有朋堂版「国語の力」48ページ）

(2)「故にこの批評の立場に於ては常に作品の形象を心の面前に於てひしと捉えてこれに面することであらねばならぬ。」（同上書、58ページ）

(3)「もし文の文意を会得して、これを解釈せんとする理性が作用する時には、こゝに心の面前に現前するものが作者の思想の姿即ち『文の形』であって、解釈の作用が文の形から始められるのが、最も確実なスタートの切り方であると考えられるのは、独り教授の経験からでもなく、実験心理学の論証からでもなく、真に文の本質に接近すると考え得るからである。」（同上書、68ページ）

(4)「この不快な経験の累積の間から、そうした主観的態度に沈潜することなく、事物的対象に惑乱さるゝことなくして解釈の要求を充たすために、文の形をひしと心の面前に置いて、それを研究の対象とする作用を意識しなければならぬことを切に感ずる。」（同上書、94～95ページ）

(5)「師の注意を聞くと直ぐに、むら〳〵と胸中に起った反感と、それを心の面前に引き据えて凝視して居る自己との押し問答で

ある。」（同上書、99ページ）

(6)「センテンス・メソッド、解釈法、批評法に於て、文の主眼点の直下の会得を以て出発するのは、こゝにいう『文の形』を観取して、心の面前に現前せしむることを意味するのである。」（同上書、117ページ）

(7)「然らば文中の言語を解釈する着眼点はその定着性の上に注がねばならぬ。而してそれを文の全意に関係せしめつゝ、文を解釈した一つの仮定を心の面前に捉えて、其の真意味を求むることから、言語の活力を見出し仮定の中から定説を推論することであらねばならぬ。」（同上書、134～135ページ）

(8)「（前略）、緊切な問題は日本文学の本質の展開を研究の対象となるまでに浮かみ出させて心の面前に据えることである。」（同上書、248ページ）

(9)「現在、我々の心の面前にある日本文学の展開の姿は、政治史的に一まとめにした書史学的群繁である。」（同上書、248ページ）

(10)「日本文学の全面をかように統一する時に、日本文学の体系的発生的なる展開が、研究の対象として心の面前に現われて来るであろう。」（同上書、265ページ）

(11)「若干の愛読の書を所有して常に照心の光を心の前にかゝげることは『読むこと』の極致である。」（同上書、280ページ）

これらの例に見られる「心の面前」「自己の面前」「心の前」は、特定の用語でも基本的術語でもないが、垣内松三先生のことばづかいとして、その「文」そのものに、「文の形」そのものに、「日本文学の本質の展開」そのものに、ひたむきに直面していく態度を示すものとして、また研究対象や観察・解釈の対象を、どうひきすえるべきかを示すものとして、注目すべきものをもつ。

以上、「国語の力」考察の基本問題として三つをとりあげた。

1の「実践」の問題の考察は、「国語の力」の成立過程を追求し、内容を分析していくばあいの一つの手がかりとなろうか。

2の「国語教授と国語教育」の「立場」の問題の考察は、国語教育学の源流としての「国語の力」の性格をあきらかにしていくのに役立つであろう。

3の「心の面前」の問題の考察は、「国語の力」の内容を分析し、さらに垣内松三先生の学問の態度・方法を考えていく上に一助となるであろう。

「国語の力」は、国語教育学説史研究の対象として、巨大な存在である。ここでは一、二、三、四を通じて、「国語の力」についてのいくつかの基礎作業をこころみたにすぎない。

四　（「国語の力」研究（参考）文献目録）

○第二読み方教授　芦田恵之助著　大正14・9・15、芦田書店

○現代読方教育の鳥瞰と批判　吉田弥三郎　鈴木源輔著　昭和4・1・5　日本教育学会

○垣内先生の御指導を仰ぐ記　芦田恵之助著　昭和7・7・5　同志同行社

○国語教育科学史　飛田　隆著　昭和8・7・19　「国語科学講座」所収　明治書院

○国語教育史　渡辺　茂著　昭和8・11・20　「国語科学講座」所収　明治書院

○形象理論の教育的批判　石山　脩平著　昭和10・6・1　雑誌「教育」3の6　岩波書店
○「国語の力」にあらわれた言語哲学的思想　興水　実稿　昭和12・12・15　晩翠会「言語文化体系」所収紀要　不老閣書房
○国語の力　金原　省吾稿　昭和12・12・15　晩翠会紀要「言語文化体系」所収　不老閣書房
○垣内先生の「国語の力」改版　名取　堯稿　昭和12・12・15　晩翠会紀要「言語文化体系」所収　不老閣書房
○国語の力　大場　俊助著　昭和12・12・15　晩翠会紀要「言語文化体系」所収　不老閣書房
○純粋なる「と」を求めて　興水　実稿　昭和12・12・15　晩翠会紀要「言語文化体系」所収　不老閣書房
○垣内先生と私　芦田恵之助稿　昭和13・1・1　雑誌「国語教室」4の1　文学社
○言語・国語・国語の力　東条　操稿　昭和13・1・1　晩翠会紀要「形象論と国語教育」所収　啓文社
○垣内先生の学説―言語文化学説研究第一篇―　興水　実稿　昭和13・1・11　文学社
○「石叫ばむ」と「国語の力」　金原　省吾稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○「国語の力」出版まで　中西浜太郎稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○荊のみち―国文学界に於る先駆者垣内教授の辿れる道程―　齋藤　清衛稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○垣内先生と国語教育界　西原　慶一稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○国語教育者としての垣内先生―「国語教授の批判と反省」を中心に―　石井　庄司稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○文学史家としての垣内先生　関根　孝三稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○垣内先生の文学思潮論　名取　堯稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○国語教育と垣内先生　滑川　道夫稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○形象理論に於ける学的問題―垣内先生に関連して―　興水　実稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○その頃の先生　稲村　テイ稿　昭和13・2・1　雑誌「コトバ」8の1　コトバの会
○垣内学説の学的実践的優位　大野　静稿　昭和13・2・1　雑誌「同志同行」6の11　同志同行社
○愛国の熱情　加茂　学而稿　昭和13・2・1　雑誌「同志同行」6の11　同志同行社
○孫弟子　安田　孝平稿　昭和13・2・1　雑誌「同志同行」6の11　同志同行社
○有難い先生　三浦　ひろ稿　昭和13・2・1　雑誌「同志同行」6の11　同志同行社
○読方教育思潮論　石井　庄司著　昭和14・2・5　晃文社
○「石叫ばむ」と「国語の力」　金原　省吾稿　昭和14・3・18　「国語表現」所収　啓文社

○国語教育の方法論より観たる形象理論への批判　山下　徳治稿　昭和14・10・1　雑誌「教育・国語」9の10　厚生閣
―垣内教授及び石山・興水両氏に教えを乞う―
○形象理論の批判を読みて　興水　実稿　昭和14・10・1　雑誌「教育・国語」9の10　厚生閣
○国語教育史に於ける形象論の影響について　渡辺　茂稿　昭和14・11・1　雑誌「コトバ」1の2　国語文化研究所
○シムポジウム　垣内学説の真髄と今後の動向に就いて　昭和14・11・1　雑誌「コトバ」1の2　国語文化研究所
○発表者　袖崎　修稿
○観念主義の内部における摩擦　山下　徳治稿
○あらわれたものの背後にあるもの　波多野完治稿
○形象理論によって形象理論のうえに　石井　庄司稿
○シンポジウム感想　斎藤　清衛稿
○形象理論は如何なる啓学か　興水　実稿
○形象理論と言語教育（上・下）　興水　実講　昭和15・10・1　雑誌「同志同行」9の6・7　同志同行社
○国語研究法　時枝　誠記著　昭和22・9・30　三省堂
○国語教育概説　倉沢　栄吉著　昭和25・9・20　岩崎書店
○「国語の力」（国語教育文献解題）　興水　実稿　昭和26・8・5　国語教育講座「国語教育資料」所収　刀江書院
○「国語の力」（再稿）（国語教育文献解題）　興水　実稿　昭和26・8・5　国語教育講座「国語教育資料」所収　刀江書院
○文章論の一課題　時枝　誠記稿　昭和26・11　雑誌「国語研究」8　愛媛国語研究会
○国語教育原論　興水　実著　昭和27・8・31　朝倉書店
○国文学に遺された業績　斎藤　清衛稿　昭和27・11・1　雑誌「国語と国文学」29の11　至文堂
○その頃の垣内先生　西尾　実稿　昭和27・11・1　雑誌「国語と国文学」29の11　至文堂
○垣内先生のことなど　久松　潜一稿　昭和27・11・1　雑誌「国語と国文学」29の11　至文堂
○「国語の力」はよみがえる　西原　慶一稿　昭和27・11・1　雑誌「実践国語」13の一四七　穂波出版社
○垣内先生の学問的業績　興水　実稿　昭和27・11・1　雑誌「実践国語」13の一四七　穂波出版社
○国文学研究法と垣内松三先生　久松　潜一稿　昭和27・11・1　雑誌「実践国語」13の一四七　穂波出版社
○先生の国文学研究（思い出風に）　斎藤　清衛稿　昭和27・11・1　雑誌「実践国語」13の一四七　穂波出版社

○形象論

○国語学における垣内先生

○垣内先生と日本語

○先生の学風

○垣内先生と国語の力

○垣内先生の武蔵野時代

○「国語の力」の位置

○垣内先生と私

○垣内先生の学恩

○垣内先生の思い出

○追　憶

○垣内先生と国語教育

○垣内先生と国語教育

○垣内先生と今後の国語教育

○垣内先生と国語教育

○垣内先生の学説

○読むことの学習指導の史的考察

○「国語の力」の現代的意義

○先生の日本文学論研究

○国語学研究者のために

○国語教育の学的研究のために

○実践者のために―垣内的秘奥―

○垣内先生の学業と「国語の力」

○垣内先生の学績・論文・著述

○国語科教育学

金原　省吾稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
大西　雅雄稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
石黒　修稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
能勢　朝次稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
飛田多喜雄稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
飛田　隆稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
滑川　道夫稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
井上　赳稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
大西　雅雄稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
熊沢　龜稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
沖山　光稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
田中豊太郎稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
志波　末吉稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
倉沢　栄吉稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
沖山　光稿	昭和27・11・1	雑誌「実践国語」13の一四七	穂波出版社
飛田　隆稿	昭和28・3・15	雑誌「国語」2の1　西東社	
西原　慶一稿	昭和28・7・18	国語教育実践講座「読むことの学習指導」所収　牧書店	
西尾　実稿	昭和28・8・20	刊行会本「国語の力」所収	有朋堂
斎藤　清衛稿	昭和28・8・20	刊行会本「国語の力」所収	有朋堂
時枝　誠記稿	昭和28・8・20	刊行会本「国語の力」所収	有朋堂
興水　実稿	昭和28・8・20	刊行会本「国語の力」所収	有朋堂
西原　慶一稿	昭和28・8・20	刊行会本「国語の力」所収	有朋堂
渡辺　茂稿	昭和28・8・20	刊行会本「国語の力」所収	有朋堂
渡辺　茂稿	昭和28・8・20	刊行会本「国語の力」所収	有朋堂
興水　実著	昭和30・3・10	金子書房	

○国語教育学の理論と歴史　石井　庄司稿　昭和30・7・20　続教育大学講座7「国語科教育」所収　金子書房
○国語教育科学期以前　西原　慶一稿　昭和30・11・15　「国語教育の諸問題」所収　光風出版
○近代における国語教育の史的展望　渡辺　茂稿　昭和13・7・11　明治書講座「国語教育の進路」所収　明治図書
○形象理論と国語教育　大場　俊助稿　昭和12・1・5　「国語教育辞典」所収　朝倉書店
○言語教育の歴史　興水　実稿　昭和32・1・5　「言語教育」所収　河出書房
○「国語の力」と「文化意識」　藤井　信男稿　昭和33・4・1　雑誌「実践国語」一九の二一〇　穂波出版社
○「国語の力」の錯簡　石井　庄司稿　昭和33・4・1　雑誌「実践国語」一九の二一〇　穂波出版社
○国語教育研究史論　石井　庄司稿　昭和33・5　「国語教育科学論」所収　明治図書

（昭和33年6月6日初稿、昭和33年8月16日再稿　昭和33年10月25日補稿）